

⇒ 論 説 ⇐

『リア王』第一・四つ折り本に見られる
文法的標準化の痕跡に関する一考察

辻 照 彦

1 はじめに

『リア王』の重要なテキストには、1608年に出版された第一・四つ折り本（First Quarto, 以下Qと略す）と、1623年に出版された第一・二つ折り本（First Folio）に収められたテキスト（以下Fと略す）の二つがある。Qの印刷所原稿については、シェイクスピアの自筆原稿であるということではほぼ研究者のコンセンサスができていいる。これに対して、Fの印刷所原稿については、上演台本が参考にされたことを除けば、コンセンサスが形成されているとは言い難い。

QとFのテキスト間に大小、膨大な数の異同が存在することから、その発生のメカニズムを説明することが長年、研究者の課題であった。それには複数の要因が複雑に関係していることは明らかであるが、筆者は、両テキスト間に異同が増加した重要な原因の一つとして、Qが出版される際の編集作業に注目してきた。シェイクスピアの自筆原稿からQが印刷される過程で、編集者の人物が介入し、様々なレベルで書き換えを行ったとする仮説である。

この人物が行った具体的な編集作業としては、単語の書き換えや削除、数行にわたるパッセージの削除、台詞の移動、台詞の頭書き（Speech Prefix）の変更などを想定している。そして、それらは一定の目的をもって、作品の全体を通して実行されているように思われる。筆者は、テキスト内の明白な矛盾点や不整合の解消を目的とする書き換えについてすでに分析を試みた¹⁾。本論では、この編集者に見られるもう一つの傾向、すなわち、文法を標準化しようとする試みについて考察してみたいと思う。

本論の分析のきっかけとなったのは、『リア王』の両テキスト間に見られる異同の中には、例えば『ハムレット』と比較した場合、文法に関係しているものがかなり多いという発見である。そして、それらを総覧すると、従来杜撰なテキストとされてきたQのほうがFよりも文法的により標準的になっている場合が圧倒的に多くなっている。これはどう説明すべきだろうか。この奇妙な現象は、Qの編集者が文法的標準化という編集作業を行った結果なのではないかというのが本論で証明しようとする仮説である。

2 Q と F に見られる文法的異同

『リア王』の Q と F の間に見られる文法的異同について、単純で分かりやすい例をいくつか見ていくことにしよう。最初の例は代名詞に関するものである。2幕2場でケントはオズワルドと乱闘騒ぎを演じた後、コーンウォール公爵の前でオズワルドのことを「自然の女神ではなく、仕立て屋が作った代物だ」と言って侮辱する。コーンウォールに「仕立て屋だと」と質問されて、Fのケントは次のように答える²⁾。

F :

A Taylor Sir, a Stone-cutter, or a Painter, could not haue made him so ill, though they had bin but two yeares oth'trade.

(TLN 1131-1133; 2. 2. 58-60)

同じ箇所がQでは次のようになっている³⁾。

Q :

I, a Tayler sir; a Stone-cutter, or a Painter could not haue made him so ill, though hee had beene but two houres at the trade.

(Elv 12-14)

注目したいのは、引用の後半に出てくる代名詞であるFの *they* とQの *he* である。「石工または絵描き」のように、2つの単数名詞が *or* で結ばれている場合、それらを指す代名詞としては、Fのような複数形よりも、Qのように単数形が文法的に正しいとされる。しかし *OED* は、単数形の主語が *or* で結合されるとき、厳格な論理や現代文法家の規則は動詞や後出の代名詞が単数形であることを要求するが、このような場合に複数形を用いる傾向はずっと続いていると解説して、文法家の期待に反した使用が多いことを認めている⁴⁾。

ダシーは、Fは文法的に間違っているが、シェイクスピアが書いたものを正確に再現していないと考える理由はないと述べて、Fをシェイクスピアのオリジナルとみなしている。そして、少し後の2幕2場70行目にも、QとF共通して、三人称単数の主語を *rebel* という複数形の動詞で受けている文法的間違いがあることを指摘している⁵⁾。その箇所をFのテキストで見よう。ケントは奴隷のような男が帯剣していることが許せないと行って、引き続きオズワルドを侮辱する。

such smiling rogues as these,
Like Rats oft bite the holy cords atwaine,
Which are t'intrince, t'vnloose: smooth euery passion
That in the natures of their Lords rebell,
(TLN 1146-1149; 2. 2. 73-76)

動詞 rebel の主語は passion なので、文法的には rebels とするのが正しいだろう。しかし、直前にある lords のような複数形の名詞に動詞の形が影響を受けてしまうことはシェイクスピアにしばしば見られる現象である⁶⁾。確かにダシーが指摘するように、rebel に見られる文法的逸脱を考えれば、数行上でシェイクスピア自身が非標準的な代名詞を使用したとしても決して不自然ではないだろう。

次の例は二重否定に関するものである。1幕2場でエドガーを陥れようとするエドモンドは、父グロスターと最近話をしたかとエドガーに尋ね、2時間前に会ったばかりだと答える兄に対して、その時のグロスターの様子を次のように質問する。

F:
Found you no displeasure in him, by word, nor countenance?
(TLN 478-479; 1. 2. 156-157)

Q:
found you no displeasure in him by word or countenance?
(C2v 28-29)

F では二重否定 (no . . . nor) という非標準的用法となっているのに対して、Q では標準的用法になっている。二重否定は、論理的には否定が打ち消されて肯定の意味になりそうだが、実際には否定を強調しているに過ぎない。アボットは二重否定を不規則用法とはしながらも、繰り返すことでより強調したいという願望の表れとして説明できると指摘している⁷⁾。二重否定の用法はシェイクスピア作品に珍しいわけではない。『お気に召すまま』で、シーリアがアーデンの森で疲れ切って 'I cannot go no further' (2. 4. 10) と言う時、もうそれ以上歩けないことを強調しているのである。エドモンドの台詞の場合も、シェイクスピアのオリジナルが F のように二重否定を含んでいたとしても決して不思議ではないのである。ダシーも二重否定を含む F をシェイクスピアのオリジナルとみなしている⁸⁾。

次の例も否定に関するもので、nor の変則的な用法である。1幕4場の舞台であるオルバニーの屋敷で、リアは久しぶりに会った道化と雑談を楽しんでいるが、そこにゴネリルが入ってくる。睨まれた道化は、口を噤むことを約束しながらも、リアを当てこすってバラードの断片を

次のように歌う。

F :

Mum, mum, he that keepes nor crust, not crum,
Weary of all, shall want some.

(TLN 710-711; 1. 4. 197-199)

Q :

Mum, mum, he that keepes neither crust nor crum,
Wearie of all, shall want some.

(D1v 3-4)

F では、nor A nor B という変則的な表現となっているのに対して、Q では neither A nor B という標準的な表現になっている⁹⁾。副詞 neither の代わりに nor を使用することは、*OED* によれば、主に詩に見られる¹⁰⁾。‘Nor heaven nor earth have been at peace to-night’ という『ジュリアス・シーザー』2幕2場冒頭の台詞は有名だが、シュミットのレキシコンを見ると、シェイクスピア作品に30を超える nor A nor B という用例があることが分かる¹¹⁾。また、本例は、発話者が道化であること、さらに、一部の研究者が指摘しているように、その台詞が風刺的なバラードからの断片的引用である可能性が高いことを考慮すれば¹²⁾、シェイクスピアのオリジナルが F のような非標準的表現であったことは十分考えられるだろう。

次の例は、主格関係代名詞の省略に関するものである。1幕4場で、リアは久しぶりに道化と再会する。リアは、全財産を二人の娘に与えてしまったことを辛辣にからかう道化に対して鞭を見せながら注意する。道化は、真実を語るものは冷遇されると言って次のように嘆く。

F :

Truth's a dog must to kennell,

(TLN 641; 1. 4. 111)

Q :

Truth is a dog that must to kenell,

(C4v 15)

ここでも、F では関係代名詞を省略するという不規則な表現になっているのに対して、Q では that という関係代名詞を使った標準的な形になっている。アボットによれば、シェイクスピアの時代には、目的格の関係代名詞だけでなく、主格の関係代名詞もしばしば省略された。

そしてそれは、関係節の動詞の直前に先行詞がある場合が多かった¹³⁾。本例もそのパターンに合致している。ダシーはこの例でも、F をシェイクスピアのオリジナルと考えているが、Q に見られる関係代名詞については、何らかの理由で Q の原稿に紛れ込んだものと指摘しているだけである¹⁴⁾。

最後の例は、前置詞 *below* の使用に関するものである。5 幕 3 場の決闘の場面で、エドガーはエドモンドに向かって、兄弟と父親を裏切り、オルバニーに対して陰謀を企む裏切り者だと言って、次のように非難する。

F :

And from th'extremest vpward of thy head,

To the discent and dust below thy foote,

A most Toad-spotted Traitor.

(TLN 3091-3093; 5. 3. 137-139)

Q :

And from the'xtreamest vpward of thy head,

To the descent and dust beneath thy feet,

A most toad-spotted traytor

(L1v 35-37)

「足の下」という表現で、F は前置詞の *below* を使っているのに対して、Q は *beneath* を使っている。*OED* はこの *below* の意味を ‘Directly beneath’ と定義して、より厳密には、*under* や *beneath* によって表現されると説明し、『リア王』のこの箇所を初出例として挙げている¹⁵⁾。ある物が別の物の直下にあたり、覆われているような状態の時には *under* や *beneath* が好まれるということで、この例でも Q のほうがより標準的な表現になっている。実際、この箇所については、Charles Jennens や George Steevens をはじめとして、*beneath* を採用している編者は少なくない¹⁶⁾。

『じゃじゃ馬馴らし』にも、芝居の最後のところで、すっかり従順になったケイトが、夫に対する妻の恭順の義務を語る場面に、‘place your hands below your husband’s foot’ (5. 2. 177) という表現がある。特に「足の下」という表現の場合、*below* を使用することが、ある程度慣用になっていたのかもしれない。また、『コリオレイナス』では、人を靴底で踏みにじるという表現が ‘Below their cobbled shoes’ (1. 1. 196) となっていたり、『アテネのタイモン』では、病人の頭から枕を引き抜くという表現が ‘from below their heads’ (4. 3. 33) となっている。以上の例から判断すると、『リア王』の場合も、たとえ非標準的な使用法であっても、シェイクスピアが *below* を使用した可能性は十分考えられるのである¹⁷⁾。

以上分かりやすい例を見てきたが、『リア王』のテキスト間に見られる文法に関する異同の場合、Qのテキストの方がより標準的な表現になっている場合が圧倒的に多い。実際、Fの方がより標準的になっているという例はほとんど見られないのである¹⁸⁾。このような奇妙な現象が生じたメカニズムについて次に考えてみよう。

3 異同発生メカニズム

『リア王』のテキストについては、シェイクスピアの自筆原稿があり、それを源流として、QとFのテキストが誕生したと考えられている。テキスト間に異同がある場合、QとFのどちらかに、シェイクスピアの自筆原稿の表現がより正確に反映されている可能性が高い。文法に関する異同については、どちらをシェイクスピアのオリジナルと考え、どちらを変更後の形と考えるべきだろうか。

Qをオリジナルと考える場合、文法的に標準的だった表現が、Fが印刷されるまでの過程で非標準的な表現に変わってしまったことになる。その原因となる人物としては何人か考えられる。まず、台本を作成するためにシェイクスピアの自筆原稿を清書した筆耕が写し間違えるケース。次に、役者が上演時に台本と異なる台詞を口にし、それがFの原稿に反映されるケース。さらに、台本を参考にしながらFの原稿を準備した筆耕または編集者の人物が誤写するケース。そして植字工の誤植などである。

他方、Fをオリジナルと考える場合、異同発生の原因として考えられる行為者は少数に絞られる。Qの原稿がシェイクスピアの自筆原稿であることを考えると、役者や、かつて提唱されたような、劇場で役者の台詞を密かに書き留めた速記者を異同の原因として想定することはできないからである。この場合は、Qの原稿を整理した編集者の人物か植字工しか考えられないだろう。

Qがオリジナルで、Fは変更後の形だとする考えは、それぞれのテキストが出版された順序とも矛盾がなく、一見もっともらしく思われる。しかし、最大の難点は、オリジナルで標準的だった表現が、なぜ非標準的、あるいは少し稀な表現に変化したのかうまく説明できないことである。単なる役者の言い間違いや、筆耕の誤写を原因と考えることには無理がある。彼らの過失の結果として生まれた表現の多くが、シェイクスピアが他の作品中で比較的頻繁に犯している文法的逸脱に重なり合うというのは、偶然の一致にしてはあまりに不自然だからである。

さらに、Fの印刷関係者たちが書き換えたとする仮説にも問題がある。QのテキストがFの印刷原稿であった、あるいは、少なくとも印刷の際に参考にされていたことを考えると、Fの印刷関係者たちは、Qの標準的な表現を目にしていたにもかかわらず、それを無視して、わざわざ非標準的な表現に書き換えていったと想定しなければならないからである。むしろ、より自然で無理のない説明は、シェイクスピア自身が非標準的なFの表現の責任者であり、それが何者かによってQのように書き換えられたというものだろう。

Fに見られる非標準的表現がシェイクスピアのオリジナルであることを比較的是っきりと示す例を見てみよう。1幕2場冒頭の独白でエドモンドは、嫡子に対する庶子の優越性を次のように語る。

F：

Why brand they vs
With Base? With basenes Batstadie? Base, Base?
Who in the lustie stealth of Nature, take
More compositon, and fierce qualitie,
Then doth within a dull stale tyred bed
Goe to th'creating a whole tribe of Fops
Got 'tweene a sleepe, and wake?
(TLN 343-349; 1. 2. 9-15)

Q：

why brand they vs with base, base bastardie? who in the lusty stealth of nature, take more composition and feirce quality, then doth within a stale dull lyed bed, goe to the creating of a whole tribe of fops got tweene a sleepe and wake;
(Clr 21-24)

Fでは creating の直後に目的語が続いているのに対して、Qでは目的語の前に ofがある。Qは散文で印刷されているが、オリジナルはFの行配列が示すように韻文だったはずである。そして、音節の数から考えれば、シェイクスピア自身が、Fのように、creatingの後にofを入れなかったことは間違いないのである。

文法的に言えば、creatingは定冠詞がついているので名詞であり、目的語の前にはofを入れた方が正しいことになる。しかし、アボットが指摘しているように、定冠詞がついていても、それを動名詞と混同してしまい、目的語を直接従えることがある¹⁹⁾。台詞が韻文で書かれている場合は、韻律を整える必要上その傾向が強くなる。『マクベス』1幕4場には、マルカムが、コーダーは反逆の罪を告白し、深い後悔の言葉を口にして、武人にふさわしい死を遂げたとダンカン王に説明する場面がある。その台詞は‘Nothing in his life / Became him like the leaving it’ (1. 4. 7-8) となっている。ここでも、厳密にはitの前にofが必要とされるところだが、韻律の関係でそれが省略されている。

エドモンドの独白の場合、Qに見られる前置詞のofはオリジナルへの加筆と考えてよいだろう。そしてその加筆の目的は、文法の標準化以外に考えられない。この例は、Fに見られる不規則な表現が実はシェイクスピアのオリジナルであり、それがQの印刷の過程で、何者か

によって標準的な表現に書き換えられてしまった事実を示す貴重な例になっている²⁰⁾。

『リア王』のQに見られる文法の標準化は、全体的に見れば、文法的逸脱の簡単な修正になっている場合が多く、台詞の意味に影響を与えるようなものではない。しかし中には、台詞のリズムを阻害したり、韻律を乱す結果となっている場合もある²¹⁾。さらには、文法的標準化が必ずしも成功しているとは言い難い例もある。そのような例を次に見てみよう。

4 文法的標準化が成功していない例

Qの文法的標準化が必ずしも成功しているとは言えない例をいくつか見ていくことにしよう。最初の例は、4幕7場でコーディーリアがリアと再会する場面である。まだ眠っているリアが連れてこられると、コーディーリアはこの高貴な白髪の老王を虐待した姉二人を次のように非難する。

F:

Had you not bin their Father, these white flakes
Did challenge pittie of them.

(TLN 2781-2782; 4. 7. 29-30)

Q:

Had you not bene their father these white flakes,
Had challengd pitie of them,

(K2r 12-13)

これは仮定法の文章だが、条件節は、FもQも過去完了時制になっている。他方、主節は、FではDid challengeと過去時制であるのに対して、Qでは条件節と同じ過去完了になっている。動詞challengeも、Fの原形に対してQの過去分詞という違いがあることを考えると、この異同は、植字工による原稿の読み間違いなどによって起こるものではないだろう。

表面的には、Qの方が文法的に標準的な表現になっているように見える。しかし、ダシーは、Fの形も十分許されるもので、仮定法の不規則な時制照応の例だと指摘し、Qのような規則的な文章に変えてしまった行為者は、芝居を記憶に基づいて再生したレポーターだと主張した²²⁾。確かに、条件節が仮定法過去完了であっても、その影響が現在まで及ぶ可能性がある場合には、主節の時制が仮定法過去になることはそれほど珍しいことではないだろう。コーディーリアの台詞も、リアの白髪を目の前にして述べられていることを考えると、過去の推測として語られているQよりも、より現在に引き付けて、今も妥当な推論として述べられているFの表現を擁護することもできるかもしれない。

しかし、Fに見られるシェイクスピアのオリジナルの表現を、より積極的に弁護することも可能なようだ。アボットは、仮定法が直接法過去と同じ形になる場合について『ヴェニスの商人』を例に挙げて解説している。2幕1場でポーシャは、箱選びに先立って、自分の立場を次のようにモロッコ王に説明する。

But if my father had not scanted me,
And hedg'd me by his wit to yield myself
His wife who wins me by that means I told you,
Yourself, renowned Prince, then stood as fair
As any comer I have look'd on yet
For my affection.

(2. 1. 17-22)

アボットは、引用4行目の stood は仮定法だと指摘した上で、stood とした場合と would have stood とした場合の違いについて、直接法過去と同じ音である単純な仮定法はエリザベス朝人により必然性を示唆したと思うと述べて、stood は would certainly have stood の意味だと解説している²³⁾。これに従えば、コーディーリアの台詞の did challenge も would certainly have challenged の意味となる。つまり、コーディーリアの二人の姉に対する非難の気持ちは、Fの方がより強調されているのである。このように考えると、Fの表現は単に許容される形というだけでなく、この文脈ではQよりも適切な表現だと言うこともできるだろう。

Qの編集者の修正が明らかに失敗しているように思われる例もある。3幕2場の嵐の場面でリアは、雷雨と強風に呼び掛けて、自分から王国を譲り受けた子供ではないから、容赦なく自分を苦しめるがよいと叫んだ後、次のように言う。

F :
But yet I call you Seruile Ministers,
That will with two pernicious Daughters ioyne
Your high-engender'd Battailes, 'gainst a head
So old, and white as this.

(TLN 1676-1679; 3. 2. 21-24)

Q :

but yet I call you seruile

Ministers, that haue with 2. pernitiuous daughters ioin'd

Your high engēdred battel gainst a head so old & white

As this,

(F4r 22-25)

Fでは will...ioyne となっているところが、Qでは haue...ioin'd と現在完了形になっている。一見すると、嵐はその時すでにリアを翻弄しているのだから F の未来形は不適切で、Q の現在完了形が正しいように思われる。この異同についてダシーは、F は問題ないだけでなく、Q よりも優れているように自分には思われると言って、will はここでは are willing や desire の意味だと指摘している²⁴⁾。

確かに、ダシーが主張するように解釈すれば、F のほうがリアを苦しめる嵐の無慈悲さや執拗さがより伝わってくる感じがする。そして、このような臨場感を巧みに伝える表現はシェイクスピアの自筆原稿に元々あったと考えた方が自然である。確かに、シェイクスピアは初めに Q のように書いて、後年それを F のように訂正したと考えることも理論上は可能であるが、その実現可能性は極めて疑問である。表面的には何の問題もない Q の表現にピンポイントな修正を加えて、F のような、リアの苦痛をより強調する表現に仕上げるというのは、想像するほど容易なことではないだろう。

それに対して、F をシェイクスピアのオリジナルと考えれば、それを編集者の人物が Q のように書き換えてしまうことは十分考えられる。その人物は、主語の固執を表す will を単純な未来の助動詞と勘違いをしたか、あるいは読者が勘違いしそうだと判断したのだろう。そして未来時制は、リアがすでに嵐に翻弄されている状況と明らかに矛盾すると考えて、時制を現在完了に書き換えたのである。

もう一つ、時制に関する似た例を見てみよう。3幕4場で、嵐から避難するためにリアとケントたちは、トムに扮したエドガーが潜む小屋の前にやって来る。リアは物乞いであるトムの哀れな姿を見て次のように言う。

F :

Ha's his Daughters brought him to this passe?

Could'st thou saue nothing? Would'st thou giue 'em all?

(TLN 1844-1845; 3. 4. 63-64)

Q:

What, his daughters brought him to this passe,
 Couldst thou saue nothing, didst thou giue them all?
 (G2r 3-4)

Fの最後の文章の *would* が Q では *did* になっている。一見すると、Qの方が明快で分かりやすい表現のように見える。しかし、Fの *would* は直接法で、過去の願望を表していて、「娘たちにすべてを与えたいと思ったのか」という意味である。そう考えれば、Fのままでも問題ないだけでなく、Qの客観的に事実確認をするだけの表現と比べると、周りの反対を無視した頑迷な行為を後悔する気持ちがよく伝わってくる感じがする。

筆者は、この例でも F がシェイクスピアのオリジナルで、それが Q のように変更されたのだと思う。問題のない Q の表現を F のように書き換えるというのは、先の固執を表す *will* の例と同様、想像するほど容易ではないだろう。それに対して、Fの *would* は、表面的には、より一般的な現在の願望を表す仮定法とも受け取れる。つまり、「娘たちにすべてを与えたいと思うのか」という意味である。Qの編集者は、この *would* を現在の願望を表す普通の意味だと誤解したか、あるいは、読者がそのように誤解するかもしれないと考えたのだろう。そして、リアの質問がすでに一文無しとなっているトムの状況と矛盾しないようにするために、編集者は Q のような表現に書き換えたのである²⁵⁾。

5 むすび

シェイクスピア作品のテキストを恣意的に校訂する行為は、現在では許されるものではない。しかし、かつてはそのような例が見られたことも事実である。その代表としてしばしば非難されるのは詩人のアレグザンダー・ポープだろう。例えば『ハムレット』1幕4場に、ハムレットが、すべての美点を台無しにする人間の欠点についてホレイシヨーンに説明する有名な場面がある。ここは第二・四つ折り本のみに見られる台詞だが、その一部は次のようになっている。

that these men,
 Carrying, I say, the stamp of one defect,
 Being nature's livery, or fortune's star,
 His virtues else, be they as pure as grace,
 (1. 4. 30-33)

ポープは引用最終行の *His* を *Their* に校訂した。これは代名詞を *these men* という複数名詞に合わせた文法的修正である。シェイクスピアは、『ハムレット』1幕3場50行目でも *pastors*

という複数名詞を himself で受けたり、3幕2場191行目では、逆に、purpose という単数名詞を they で受けている。文法的に不規則な表現はシェイクスピアに少なからず見られるため、現代の編纂者の多くは、His をシェイクスピアのオリジナルと考え、ポープの変更を恣意的なものとして排除するだろう。

『リア王』のQのテキストについても、ポープが編纂したテキストと同じように、何者かによって、文法的標準化が施されているというのが本論の主張である。その作業の痕跡は、『リア王』の1幕から5幕まで偏りなく見られる。局所的で偶発的な修正というより、作品全体を通じた、ある程度システマチックな編集作業とすることができる。

Qに見られる文法的標準化は、全体的に見れば、台詞の意味にほとんど影響を与えない表面的なものが多い。しかし中には、台詞のリズムや韻律を乱してしまっている訂正や、オリジナルに見られた感情豊かな表現を生気のないものに変えてしまっている訂正も見られた。これらの短絡的で時に乱暴な訂正は、『リア王』のテキスト問題を解明する上で極めて重要で、Qのテキストが我々の想像以上に編集されていることを示す貴重な証拠となっている。

本論で見てきた文法的標準化という編集作業は、筆者が先に分析した、作品中に見られる明白な矛盾点や不整合を解消しようとする編集作業と方向性が似ている。その目的は、『リア王』第一・四つ折り本のテキストの体裁をできる限り整えることであり、そのための具体的手段は、あまりに目立つ欠点を可能な範囲で取り除いたり、修正することなのである。

結果的に、この編集者の作業は、『リア王』の重要な2種類のテキスト間に長年研究者を悩ませることになる複雑な異同を生じさせることになった。しかし、この編集者による介入は、不整合の解消や文法的標準化にとどまらなかった。その人物は、シェイクスピアの原稿に見られた古風な表現や難解な言葉をより一般的な表現に書き換える同義語置換も行っている。さらに、登場人物の動きが錯綜して分かり難い場面では、単純化するために、台詞の一部を移動したり、頭書きの変更も行っている。これらの、より大胆な編集的介入について今後さらに分析を進めたいと思う。

注

- 1) 辻照彦, 「『リア王』第一・四つ折り本に見られる校訂の痕跡—不整合を解消する傾向」, 『新潟大学経済論集』第106号(新潟大学経済学会, 2019年), 177-193頁。
- 2) 『リア王』第一・二つ折り本からの引用はすべて Charlton Hinman, ed., *The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare* (New York: Norton, 1968)に拠る。参考のために引用の末尾に付した幕・場・行数はG. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974)に拠る。また, 『リア王』以外の作品からの引用も基本的にリバーサイド版に拠る。
- 3) 『リア王』第一・四つ折り本からの引用はすべてW. W. Greg, *King Lear, 1608 (Pied Bull Quarto)*, Shakespeare Quarto Facsimiles Number 1 (Oxford: Clarendon Press, 1939; reprint, 1964)に拠る。
- 4) *The Oxford English Dictionary*, 2d ed., s. v. 'or,' I. 1. b.
- 5) George Ian Duthie, ed., *King Lear* (Oxford: Basil Blackwell, 1949), 141.
- 6) E. A. Abbott, *A Shakespearian Grammar* (London: Macmillan, 1870), para. 412.
- 7) Abbott, *A Shakespearian Grammar*, para. 406.
- 8) Duthie, ed., *King Lear*, 133.
- 9) 2番目の nor が F では not となっているが, 単純な誤植と考える。『ハムレット』2幕2場6行目でも, 第一・二つ折り本は nor を not と誤植している。
- 10) *The Oxford English Dictionary*, 2d ed., s. v. 'nor,' 2. b.
- 11) Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, 3d ed., revised and enlarged by Gregor Sarrazin, 2 vols (Berlin: G. Reimer, 1902), s. v. 'nor.'
- 12) Horace Howard Furness, ed., *King Lear*, (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1880), 77.
- 13) Abbott, *A Shakespearian Grammar*, para. 244. アボットは『リア王』の例を挙げていないが, シェイクスピア作品の中で主格関係代名詞が省略されている例を10箇所提示している。アボットのリストに含まれていないが, ハムレットがホレイシオーに送った手紙の中にも, 'I have words to speak in thine ear will make thee dumb' (4. 6. 24-25)という文章が出てくる。この例は, 主格関係代名詞の省略が必ずしも話し言葉に限定されていたわけではないことを示している。
- 14) Duthie, ed., *King Lear*, 47.
- 15) *The Oxford English Dictionary*, 2d ed., s. v. 'below,' B. 4.
- 16) Furness, ed., *King Lear*, 327.
- 17) 同じように, F の表現が必ずしも間違っていないが, 厳密に言えば, Q の方がより正確であるケースとして, before の意味で使用される till の例がある。1幕5場で, ゴネリルと喧嘩をしたリアはリーガンのもとに向かおうとするが, 道化は次女に期待する愚かさを皮肉って, 賢くなる前に年寄りになるべきではなかったと言う。F では 'Thou shouldst not haue bin old, till thou hadst bin wise' (TLN 916-917; 1. 5. 44-45)となっている。OED はこの till について 'nearly equivalent to before' と説明しているが, Q では till ではなく before になっている。
- 18) 筆者が見つけた F の文法的標準化が疑われる例は2箇所のみである。1番目は, 「ある条件でなければ」という意味の接続詞として, Q では古風で稀な except が使用されているのに対して, F ではより標準的な unless が使用されている例(1. 5. 50)である。2番目は, both change and danger を主語とする文章の動詞が Q では speakes となっているのに対して, F では speak と標準的になっている例(2. 4. 239-240)である。F には, 代名詞の a を he へ変更するといった, 広い意味でのモダニゼーションはしばしば見られるが, 文法的標準化の痕跡を見つけることはほとんどできない。なお, 『リア王』のテキストに見られる興味深い文法的異同として, F に見られる関係代名詞 which が, Q で

はしばしば that になっている点がある。この問題についてはまた改めて論じたいと思う。

19) Abbott, *A Shakespearian Grammar*, para. 93.

20) 同じようなケースで、FもQも of を省略している箇所もある。4幕4場でコーディーリアは、リアの正気を回復させる方法を医者に質問して、‘What can man’s wisdom / In the restoring his bereaved sense?’(4. 4. 8-9)と言っている。

21) 韻律を乱してまで二重比較を解消しようとしている例もある。3幕2場で、ケントは嵐に翻弄されるリアに近くの小屋に非難することを勧め、自分はリアを締め出したグロスターの屋敷に戻って、もう一度掛け合ってくると言う。Fでは‘Repose you there, while I to this hard house, / (More harder then the stones whereof ’tis rais’d’ (TLN 1717-1718; 3. 2. 64)となっている。散文で印刷されたQでは、‘repose you there, whilst I to this hard house, more hard then is the stone whereof tis rais’d’ (F4v 21-23)となっている。Qでは harder が hard になっているが、Fに見られない is があるため音節の数に変化はない。しかし、ケントの台詞は本来韻文で書かれていたはずなので、オリジナルではFのように二重比較になっていたことは間違いないだろう。Qは文法的にはより標準的になっているものの、無理やり be 動詞を挿入したために、台詞のリズムはオリジナルよりもぎこちないものになっている。

22) Duthie, ed., *King Lear*, 160.

23) Abbott, *A Shakespearian Grammar*, para. 361.

24) Duthie, ed., *King Lear*, 146.

25) 同じような、勘違いに基づく修正の例が他にもある。4幕4場でFのコーディーリアは、ドーバーでリアを保護するために将校に‘A Centery send forth; / Search euery Acre in the high-growne field, / And bring him to our eye’ (TLN 2356-2358; 4. 4. 6-8)と命令を出す。最初の文章は、目的語が文頭に置かれた変則的な語順になっているが、続く二つの文章と同様に命令文であり、百人隊がまだ派遣されていないことは明らかである。Qは変則的な語順に気づかなかったのか、最初の文章を‘a centurie is sent forth’ (I1v 3)として、百人隊がすでに派遣されたことにしている。

(本研究は JSPS 科研費 JP17K02495 の助成を受けたものである。)